

——研究ノート——

# イスラーム世界における経済的行為の 特殊性について

黒田美代子

## I

これまで中東イスラーム世界における経済は、もっぱらいわゆる近代的経済活動を分析する既存の方法論、手法によって検討されてきた。中東諸国が世界的規模で強力に作動する近代的経済、金融のネットワークに掩われている以上、それに相応しい方法論、分析手法に基づく研究成果が、この地域の経済活動の検討に重要な役割を果たすことは疑問の余地がない。それはとりわけ、外部の観察者が対象地域の経済的実勢を判断し、輸出入等の外部からの経済活動の可能性を測定するような場合には、きわめて有用である。在来の中東経済研究は、おおむねこのような角度からなされる検討の成果を集積したものといえるであろう。その貢献は決して軽視するものではない。しかしながら当の研究者たちがしばしば指摘しているように、収集可能な統計及び種々の数字は、一定の指標としての有効性をもつとはいえ、きわめて不整備なものといわざるをえない<sup>1)</sup>。それは第1に統計作成にさいしての目的及び方法が確立していないことに起因するものと思われる。第2に統計上の数値として採用あるいは把握しうる範囲が、実際の経済活動の範囲と一致していないことが挙げられよう。こうしてみる

と、一見厳密で正確な数字、統計もその質を問うならば多くの問題を抱えていることが分かる。さらにこれまでの研究は、経済活動における投資、生産性、所得、利潤あるいは赤字等々を基本因子として経済を解析するものであった。この解析の構造は、具体的数字を用いて現実の経済活動を抽象的に把握するというものである。経済活動の担い手が人間であるという厳然たる事実を考慮に入れる視座が欠落しているのではあるまいか。異文化地域における思考様式、行動パターンの相違を無視し、無機質的に経済活動を解析した場合、果してその全容が明らかとされうるものであろうか。固有の歴史、伝統、世界観を土壌として育まれた文化を共有する人々の経済活動は、他の文化圏のそれとは異なり、独自の構造とメカニズムを持つものである。

中東的な経済活動の構造とメカニズムに関しては、いくつかのイスラーム経済論の中で触れられている。イスラーム経済論は、イスラームの教えに基づく経済活動とは何かについて論じているが、同時にそれが経済行為として自立的に他と切り離された活動ではないという特性を指摘している。前者では利子（リバー）として要約される不労所得の禁止が挙げられるが、利子の禁止のみが特筆大書され、外部の観察者は、無利子銀行のファイジビリティの有無といった個別化の作業に終止する傾向がみられる。ここではイスラーム経済が社会的伝統の中で具体的に形成されていったという事実が見落とされて、社会と切り離れた“場”での論議にならざるをえない。

ところで1968年にバーキルツ＝サドルが著わした大著『イスラーム経済論』は、イスラーム経済が、社会内部の生活のさまざまな側面を律するイスラームの普遍的な形態の中に位置づけられるものであることを明らかにしている。彼はイスラーム経済の根元的特質として次の3点を挙げている。(1)多様な所有形態とそれに基づく配分の決定。(2)生産、交換、消費の諸領域における、イスラーム的価値規準による自由の制限。(3)社会的公正

の実現こそが社会に幸福をもたらし、その基本は相互責任と社会的配分の原理である<sup>2)</sup>。イスラーム経済は第1に、固有の制度、法により、人間の本性、傾向、一般的特質といった諸点で、具体的な現実と調和しうる目的を達成しようとするゆえに、現実的な経済である。第2に目的達成において、諸目的の実現のみを重視するのではなく、それらの実現のための手段においてとりわけ精神的、主体的要因に関わる点に配慮するという特徴をもっている。イスラーム経済が意図する具体的目標は、その背後に相互責任の原理を内包している。例えば貧者を援助するために富める者から財が徴収される。この相互責任を実現させる経済的義務（この例ではザカート）は、イスラーム社会の成員にとり法的に欠かすことのできない宗教的項目（五行の1つ）とされている。イスラーム経済とは、固有の基礎をもつ生活の全体的な相、形態の一部で役割を果たしているのみだということがいえよう<sup>3)</sup>。

イスラーム経済がイスラーム的システムに依存する経済体系であることは、以上から明らかとなるであろう。そして近年イスラーム世界において模索されているイスラーム経済再興の動きは、無利子銀行の設立、共同出資（ムダーラバ）形式による投資等の活動として顕現しているが、その水面下においては、イスラーム的システムを補強し、強化する潮流が存在していることも見逃すことはできないであろう。

イスラーム経済を再び確立しようという動きは、イランにおけるイスラーム革命が大きな役割を果たし、推進力となったことは否めない。しかし同時に湾岸産油国における膨大な石油収入によりあからさまとなったこの地域における富の偏在及び少数の人々による浪費、濫費と、大多数の人々の貧困のコントラストが、中東イスラーム世界の民衆の反感、反発を醸成したことも大いに関係している。貧困にあえぐ民衆は、社会的公正を実現するための相互責任と富の社会的配分がなおざりにされている事実を正確に認識していたのである。

ところで、イスラーム経済をイスラームの原理と近代経済との接点を模索する新しい試み、あるいは近代経済にイスラーム的衣をかぶせた一種の偽装とみなす外部の観察者は、この社会における根強い社会的公正への民衆の希求の本質を理解することなど思いもよらないことなのであろう。経済行為の分析にさいしては、その行為主体である人々の伝統的なものに対する十分な配慮がなされなければならない。例えばスークにおける経済活動は、旧態依然とした後進的商業活動として片付けられるものではない。近代的活動といわれる機能的、能率的経済が生み出す富の循環ですら、ここでは伝統的な場への再配分をもたらす。数量化されえない行為が、経済活動の一部であったり、通常の経済行為が宗教的義務とみなされるといったこの地域の伝統的な“経済”にアプローチするためには、これまでの経済分析の手法、方法論を止揚し、各分野を通貫するアナログ的な視座に基づく統合的分析を試みる必要があると思われる。不分明な、伝統的経済活動を読み解く1つの指標として、まず挙げられるのは、経済が全体的な場に組み込まれているという点である。確かにいかなる経済といえども、人間の営みである以上経済以外の諸活動、諸領域と密接な関わりをもっているとは自明のことである。しかしわれわれに馴染みの深い経済は、少なくとも経済行為をそれ以外と切り離して把握しうるものとし、その数値により評価することを可能ならしめるものである。しかしイスラーム経済においては、理論あるいは原理といった側面に限らず、現実に関与している、例えばスークにおける経済において、経済活動は他から完全に切り離された存在でも、それ自体で自立した存在でもない。換言するならば、ここでの経済はイスラーム的価値観に基づくシステムの中に編み込まれており、融合している。さながらマーブル・ケーキの如く、一見してチョコレート部分は他の部分と切り離し可能にみえるものの、この部分ですらチョコレート以外の要素が入り込んでいるといった具合である。

## II

イスラーム経済のありようは、きわめてアナログ的存在形態であるといふことができよう。経済がその他の諸要素、つまり宗教、社会、政治、文化等の諸要素の統合体の一部であり、それのみを切り離すことは不可能であるようなイスラーム経済システムは、個と全体との関係がつねに重視されるアナログ的な原理を基本としている。このアナログ的原理は、経済とそれ以外の領域、分野との関係の基本であるばかりでなく、経済行為の場である市場のあり方の基本でもある。バザールとかスークと呼ばれる中東の市場は、経済空間である以上に社会生活全体の中の中に組み込まれて位置し、全体の中に埋め込まれている。確かにスークは商取引の場であるが、商行為のみが突出して営まれるのではなく、情報の交換が中心的な空間なのである<sup>4)</sup>。この情報は、商取引に関するものに限定されることはない。何故ならば商取引が不正とされるものに抵触しないという配慮から、推奨される行為（ハラール）と非合法的行為（ハラーム）をはじめ、イスラーム法で規定している行動の5範疇への留意から可能な情報の収集が積極的に行なわれ、その情報を中心としてさまざまなレベルの情報交換の場を形成しているからである。

バーキルツ=サドルはその著『イスラーム経済論』で次のように指摘している。「もしも経済生活におけるあらゆる種類の活動がハラールとハラームの問題に関わりをもち、この問題が価値、理念を指示しているとすれば、イスラームに関する研究はわれわれをして、ハラールとハラームの問題がその価値、理念、概念とともに現われる経済理論の抽出、確定という作業に誘うのは当然のことであろう。」<sup>5)</sup>

経済活動の分野で厳しく禁じられている行為の第1は利子の取得であり、これはハラーム（不正）として、クルアーンでその禁止が明言されている。

「あなたがた信仰する者よ、倍にしました倍にして、利子を貪ってはならない。」(第3章130節)

「利息を貪る者は、悪魔にとりつかれて倒れたものがするような起き方しか出来ないであろう。それはかれらが“商売は利息をとるようなものだ”というからである。しかしアッラーは、商売を許し、利息を禁じておられる。」(第2章275節)

「信仰する者よ、あなたがたの財産を、不正にあなたがたの間で浪費してはならない。だがお互いの善意による、商売上の場合には別である。」(第4章29節)

ところでイスラーム世界において利子の取得が単に不正な経済行為として問題視されるのではない点を看過してはなるまい。無利子の問題は、固有の文化的ネットワークの構造の中で関係論的な位置を占めているのである。この問題は、それに対応する諸要素と関係論的に結びついている。利子取得を負とする思想の対極には、それに照応する正の部分として信徒に義務づけられている喜捨(ザカート)が存在する。これは信徒が基本的に守るべき五行の1つにあたるものである。ザカートの本来の意味は純化であるが、経済的な寄進行為が精神の純化と直結しており、しかもそれが任意の寄附ではなく、イスラーム法により制度化されているところに大きな特徴がある。自らの所有する資産の額が下限を上まわり、喜捨を行なう域に達しているムスリムには、対象となる資産の一定率を共同体に支払う義務が課される。イスラーム法上、財の種類による定率等については細かく定められているが、ザカート制度は細則に従って共同体の利益に直接奉仕するほか、退蔵をいましめ、富の還流を促すという役割を演じている<sup>9)</sup>。そして利子の禁止は、このような制度と対をなしていると理解されるべきものの、陽画と陰画の如き関係にあるものといえよう。一方で貯蓄にたいして一定率の抛出が義務づけられ、公共の利益に供されると同時に財の有効利用が奨励されている反面で、利子の取得が容認され、富の蓄積が勞せずし

て富を産み、それが退蔵されることにより貧富の差が拡大されるというのでは、片手落ちであるばかりでなく論理整合性を著しく欠くことになる。

ところでザカートの対象となる財の取得には通常2つの方法が考えられる。第1は労働に基づいて獲得した財であり、第2は遺産相続等の贈与による財である。イスラームは、私有、公有、国有といった3つの所有形態を認めている<sup>7)</sup>。シャイバーニーの『利得の書』では次のように私有の基礎となる財の獲得について信徒の守るべき道の一端としての経済倫理観を述べている。「生活の糧を得ることは、単にムスリムに許されているというばかりでなく、義務なのである。人間の第1の義務は神への奉仕であり、その遂行は衣食住が満たされてはじめて可能となる。それは働きかつ収入を得ることによってのみ達成される。」彼はさらに、生活の必要を満たす以上の収入の取得も許された行為であり、公務あるいは軍務にたいして政府から支給される収入よりも、商業や工業によって取得した収入の方が、神の意志にかなうものであるとしている<sup>8)</sup>。イスラーム的観点からすると、財の所有は労働者の労働が原因なのである。換言すれば利得の唯一の源泉は費やされた労働であるとする。もちろんこの費やされた労働には、直接的労働だけではなく、蓄積された労働も含まれている。この点に関しては、バーキルツ=サドルが前掲の著で詳述している。「事業における被雇用者が費やす労働は、費やされる時点において本人が行なう直接的労働であり、実践と消費が同時に行なわれるものである。これにたいし生産用具の使用において消費される労働は、道具の所有者から分離している労働であり、その実践と準備がすでに完了して生産活動において消費されるものである。」<sup>9)</sup>

財の取得の方法である第2の例、遺産相続についてみると、これだけを切り離して考察するならば、労働によらない財の取得に相当する故に、前者と矛盾するように思われる。しかし関係論的なイスラームにおいては、遺産相続は蓄積された労働の1形態であると理解されるのである。生活の

糧を得ることがムスリムの義務であり、かつ一家の担い手は家族の生活の維持に全責任をもつとするイスラームでは、家族を社会の最小単位の基礎であるとみなしている。夫婦を核として形成される家族は、互いに相互補完的に助け合い、慈しみ合って生活を営む故に、直接的労働の提供者本人の労働の源泉には、蓄積された労働に相当する家族の励まし、愛、喜び、必要といったさまざまな有形、無形の力、あるいはエネルギーといったものが存在している。

個と他との関わりを重視する考え方は、相続法の規定にも明確に反映している。故人の遺志に基づく遺産の分配は、3分の1以内と定められており、それ以外は拡散的に故人の親族、縁者に分けられる。遺産は故人が生まれ育ち、生活を共にした彼をとり巻く親族、縁者のネットワークを介して、詳細かつ厳密な規則に基づいて配分される。仔細についてはここで述べるいとまはないが、とりわけ関係論的である1例を挙げてみよう。男性相続人は通常同等の女性相続人の倍額を相続するという原則がある。この一見不平等ともとれる男性に優位な相続は、家族の扶養が男性の義務であるとするイスラームの基本的考え方に基づいている。男性の収入は、必要な場合には義務として扶養のために支出しなければならないのに反し、女性は第3者のいかなる指図も受けずに、任意にその財産を処分しうるのである<sup>10)</sup>。

以上イスラーム経済として、社会の中に組み込まれ、他との関わりを濃厚にもついくつかの要素について一べつしてみた。これらは、イスラーム経済が円環として順々に関係性をもち完結していくさいの、それぞれの独立した要素である。労働に基礎をおく財の取得は、必要以上の収入を得て蓄積した場合に、ザカートとして社会に還流される。ところで遺産となった財は、その財を獲得したさいの蓄積された労働として、みえざる労働提供者たる家族、親族に再分配される。こうした財の循環を容易にするメカニズムの背後にある原理は、所有の基本概念的固有性にある。単純化して



言えば、万物は神の創造物であり、真の所有者は神であるという認識である。したがって私的所有は、厳密には“占有”を意味する。しかし現実を取得するものは、生産行為つまり労働の成果として得られるのであるから、自らが手にしていないものに基づく利益は禁止されることになる<sup>11)</sup>。これは商行為においては、先物取引に当たるが、イスラーム経済が禁じるものである。

中東においてきわめて主要な位置を占めているスークにおける経済を概観してみると、以上簡単に触れたイスラーム経済の円環性が作動していることに気づく。確かにイスラーム経済が完全な形態で存在、機能するためには、あくまで完全なイスラーム社会という総体の確立が先決である。そして完全なイスラーム社会は今もって実現されてはいない。しかし登場以来15世紀に及ぶイスラームの歴史の中で、それはさまざまな程度、形態こそ異なるにせよ具体的に実践され、継承されている。経済状況の変化に応じてその理論化と実践への模索は、繰り返し試みられていることを忘れてはなるまい。15世紀に及ぶこの地域のイスラーム的ネットワークは、時に緩慢に、時に強力に作動しつづけているのである。

### III

イスラーム経済の円環性という特徴は、一々の部分の固有性に裏打ちされている。個人の労働に基礎を置く生産という基本原則は、労働の集約の上に利益をあげるという、労働の画一化、無個性化を拒む。労働は商品ではなく、売買の対象とはならない<sup>12)</sup>という認識は、労働により獲得した生産物の個性を維持する方向性を導き出す。あらゆる経済活動がその円環のアナログ的配置の一項を形成している故に、財の抽象化が排除される仕組みを作り出している。この点に関してはイスラーム世界における市場の風

景を概観する時、一層明らかとなろう。市場の位置、それをめぐる環境は、有機的でありかつ一体性と総合性をもっている。

イスラーム世界における都市空間についてすぐれた分析を行なったロベルト・ベラルディは、中東イスラーム圏の都市の建築学的調査の結果、その特徴を次のように要約している。都市へ至る主要な道筋から徐々に内部へと辿って行くと、線条的な形状と中庭を中心とした空間を基点とする形状という対立が明らかとなる<sup>13)</sup>。前者は直ちに辿りつけることを可能にする空間であるが、後者は隠蔽されているためそこに辿りつくのはより困難な空間である。そしてこの2つの形状が都市全体に広がるネットワークを構成している。戸口から戸口へ、さらにあらゆる戸口から大モスクへと至る格子縞にも似た模様を描く線条の形状の構成要素は、商店や民家であるが、あちこちで分断される。商店の列はさまざまに区分されたスークに分けられ、これらスークはいくつかの門によって閉ざされることもある。民家の列も同じように退行を閉ざす扉で互いに孤立したものとなる。つまり自由な空間と思われ、往来可能な空間とも思われたものが、分割のための空間へと変貌することを可能とする。

ところでスークは、さまざまな商品を陳列する場所を提供しているが、その背後にあたかも隠されているかのように、職人の仕事場、旅宿、マドラサ、モスク、浴場などが控えている。線条の形状の背後に、中庭を中心とした空間で構成される形状が隣接し、同時に都市全体が複合的にこれら2つの形状の織りなす生活空間の総体を構成している。いずれの形状も閉ざされた空間と同時に開かれた空間であり、生産、居住、教育、交換、分配、接触といったさまざまな機能を司る都市の諸ゾーンを区別し、分割するための道具となっている。都市は通常城門と城壁により内と外を区切るが、職人の仕事場、キャラバン・サライなどが、その門を取り巻いており、ここで商品の検査、関税の徴収が行なわれた。この門は外部の空間に対峙し、旅人にたいし選別と接待の仕かけとなっていた。この地点が小麦市場、

穀物市場、家畜、馬具等の市場となり、交易の場所となったのである。スークは、線條で作られるいくつもの小区画の連続である。それぞれは香料、金銀細工、織物、石けん等のスークを形成しているが、この囲いの連続はネットワークとしてユニットを形成している。スークが都市の囲いに添って位置しているということは、都市と農村を結びつける領域としてばかりでなく、都市と都市を取り結ぶ空間を作っていることである。ここでベラルディは、都市と都市との間に、あるいは都市と農村の間に位置するこの空間を形成しているスークが都市におけるのと同じの生存のための条件を実現し、イスラーム的な生活、生きざまのすべてを実現しようとする空間としてあると考えられていたのではなかったかと指摘する<sup>14)</sup>。

経済活動がその円環のアナログ的配置の中でそれぞれ固有の役割を演じながら有機的に一体化、総合化へと集約される空間（スーク）もまた、同様のメカニズムにより他の空間とのアナログ的配置の一環を成していると考えられる。

#### IV

これまで中東イスラーム世界における経済は、いわゆる近代的経済と伝統的経済あるいは隠された経済の2つが並存する二重構造をもつと考えられていた。この地域に特殊なスークの活動、社会における位置等を解明することは、この地の経済行為の全貌に光を当てるものであると思われる。イスラーム世界の政治、経済に関するこれまでの研究成果の多くは、看過することのできないこの地域の特殊性、特異性について無視、あるいは見過ごしてきたきらいがある。このことは例えばスーク経済の全容について書かれた論文は、特定の時代に限定された歴史的考証を除くとほとんど見当たらないといった現状からもうかがえることであろう。

現代中東世界においてスークが無視しえない経済活動の重要な一部を担っていることはよく知られているところである。

ところで中東諸国の多くは、第2次世界大戦後に国民国家として独立を達成した。歴史的に通底していた1つの地域に数多くの小国家が、世界史的状况と固有の制約の下で国境を策定し、国民国家として誕生したのである。しかし枠組みとしての国民国家は、この地域固有のいわば無境界性をもつ共同体意識と親和せず、国家レベルでは常に国民国家を超える方向への動きという力学が働いていた。したがって国民国家が所与とする国民経済は、多くの場合破綻するか、不十分に機能するにすぎない。後進性を払拭できずにいるこの地域の多くの国々が辿った社会主義的経済志向がその原因であるといった単純な説明では不十分なのである。シャー時代のイランとその崩壊の例をみれば、このことは明らかであろう。

国民経済の基盤として必要なのは、単純化して要約すれば経済が独自に自律し、それに対する国家支配を可能にする土壌であるが、この地域は、15世紀にわたるイスラーム的ネットワークが定着しており、他と切り離して経済プロパーとして自律、あるいは独り歩きすることがきわめて困難な社会的土壌である。

経済がそれ自体として他から独立して営まれることを可能にする空間を、溝つき空間と名付けるならば、中東世界はまさにこれとは逆の空間を構成する。したがって国という枠組みで規定し、囲い込む国民経済が、この地域で根付き、相応に発展するために必要とされる社会変革は、陰に陽に強力なイスラームのネットワークが社会を支えているこの地域では、挫折せざるをえなかった。固有の価値観、思想性、伝統と不可分に結びついているこの社会においては、国境線で内と外を截然と区別する国民国家のあり方同様、1つの枠内での経済行為として経済発展の推進を目指す国民経済は、きわめて限られたものとならざるをえない。

中東世界において、国家とは歴史上ダウラと呼ばれた。ダウラとは、"移

りゆくもの” “移ろいやすいもの”を意味する言葉である。したがってその国境は、実線ではなく点線で結ばれ、変更可能な国家の性格を備えている。政治的にみるならば、ダウラは目の荒いフィルターで区切られているようなもので、絶対的、固定的ではない<sup>15)</sup>。このことは当然、経済の側面にも通用することであり、空間を線で仕切って囲い込むのではなく、濾過的に通貫する活動として捉えられるのである。

現在の中東諸国における経済は、国民経済的行為とイスラーム経済的行為がまがりなりにも共存し、ある部分ではないまぜになっているといえよう。経済における社会主義化を志向したシリアを例にとるならば、国家統制の下での国民経済と並列的に、伝統的なスーク経済を許容している。しかしこのいわば共存関係は、通常考えられるような国民経済主導型ではなく、むしろイスラーム経済が受皿となって国民経済を成立させており、分母・分子の関係として捉えることができよう。例えば国家主導による下部構造の整備等は、国民経済の確定、発展の必須条件となるはずであるが、むしろその恩恵がスーク経済の活性化の呼び水として作用しているのではないと思われる。

イスラーム的経済活動は、集約的に営まれるが、それは空間的集約と同時に、他領域との関わりにおいても集約的であるが、スークはこうしたアナログ的原理が貫徹している空間である。

一般に経済空間として知られるスークは、他文化圏の市場風景との連想から容易に想像しうるが、スークを単に商取引の場、市場とする見方は、その一面のみで全体を規定することになろう。スークの構成因としては、大雑把にみても卸売、小売、倉庫、金融、輸送等の経済行為に関わる場と同時に、モスク、マドラサ、宿泊施設、公衆浴場、手工業作業場等が挙げられる。これらの諸機関の並存は、スークにおける経済活動がこれを取り巻く諸々の社会生活の一部として営まれていることを示すものである。つまり両者がないまぜになっていることが分かる。

スークはまず、一方で卸売、小売、金融等商取引の交換の場であるが、他方モスク、マドラサなどの存在からみてとれるように贈与経済の場をも構成している。ここでは交換経済と贈与経済は、切り離し難く結びついている<sup>16)</sup>。

第2の特徴としては、スーク経済がもっぱら現物取引で営まれていることである<sup>17)</sup>。ここにおける取引は、原則的に1対1の交換である。この原則が現在に至るまで貫徹しているという事実の背後には、イスラーム的経済原則が15世紀にわたり生き続けており、曲がりなりにも機能していることを物語っている。イスラーム経済において、貨幣とはものの価値を決める単位であり、交換のための手段であると同時に蓄積のための手段でもある<sup>18)</sup>。ところで資本主義経済においては、先物取引に特徴的にみられる商品不在での取引、所有者不在の取引が成立する。例えば実際に現物を所有することなしに、AからBへ売ることが可能であり、それにより利ざやを稼ぐことができる。しかしスーク経済においては、現物はそこに存在していなければならず、商人AはBから現物を買ひ、一時的であれ所有者としてそれをCへ売る<sup>19)</sup>。ここでは財の独り歩き、自己増殖はありえず、貨幣は交換価値以上のものではない。財の自己増殖に対する忌避が作動している証在でもある。イスラームの利子禁止の原則は、労働が介在しない収益を禁ずる根拠を提供しているのである。

ここで想起されるのは、イスラームの経済活動の特性を規定している1つの原理である。それはイスラーム世界に特有な原子論に基づくものであるが、ここで若干その内容を略述し、同時にそのような原理がイスラームの経済活動の一々にどのような特徴を与え、それがイスラーム経済全体にどのような構造的特性を与えているかについて一べつしてみよう。端的に言うならば、さまざまな局面においてイスラームの経済活動は、その原子論がもつような個別性、差異性が顕著であり、細部のそのような性格が、構造のアナログ性の基礎となっているのである。

イスラームの原子論的特質<sup>20)</sup>を要約すれば、以下の如くである。イスラーム的観点からすれば、ものの延長、拡がりは無限に分割されるものではなく、その最小点に原子という単位をもつ。この最小単位である原子は、アラビア語で単一実体と呼ばれるが、具体的にはそれぞれ固有の属性をもって存在する。同時に重要なことは、あらゆる実体は1つとして同じ属性を宿することがないという考えである。要するに世界の最小単位である原子は、現実的には1つとして同じものは存在せず、したがって原子の合成体である万象も無限の差異性を秘めた存在なのである。そして万象は、それぞれ差異性をもって存在しているが、同時に存在の価値として等位であるというタウヒード論に基づいた考えが、現実世界を関係論的に把握し、あるいは機能させるシステムを成立させているのである。例を挙げてこの特質を比喩的に指摘するならば、次のように述べることができるであろう。

イスラームの原子論的見方からすれば、人間各個人は、人類という1つの類概念によって一括され、そこから抽出される本質による自己規定といった形で容易にまとめあげられない。1人1人の人間は、ちょうど人類が生まれてこの方誰一人として同じ指紋を持ち合わせてこなかったように、その能力、資質において皆それぞれの固有性をもって存在しているのである。全体を本質において統括する類概念、それに基づいて築き上げられる体系性をイスラーム的観点は排除する、もしくは二義的なものとするのである。それにたいして、一々の固有性を構造化する関係性、アナログ性が強調されることになる。

以上に要約した原子論に基づいて、イスラーム経済を分析してみよう。イスラーム経済は、構造的に円環を成しているが、その1点を占める生産を基点として考えてみると、生産は労働に基づいて行なわれることは自明であるが、生産に結びつく労働は一々がきわめて個的なものであるが、それは決して売買されるものではないというのが、イスラーム的観点である。労働は生産、あるいは交換等を通して得られるもの、あるいは財を所有す

るさいの基礎ではあるが、付加価値をもたらす原因、つまりものの価値の原因ではない。したがって売買されない労働により生産が行なわれるのである<sup>21)</sup>。労働は売買されえないという考え方は、労働のみならずそれに基づく生産をも個的に、かつ原子論的に把えることを意味する。そしてこの生産の後にくる取引、交換においても、商品の個別性を消滅、あるいは排除するような均等化を前提として成立する先物取引ではなく、現物取引の原則が要請され、かつ貫徹するのである。また労働提供者が財の所有者と、その財を資金として商取引を行なうムダーラバ契約においても、一々のプログラムで完結し<sup>22)</sup>、個的性格が強い。ムダーラバ契約は、資本と労働力という対等の価値を有するものが、それぞれ拠出するという考え方を基礎にして成立する。資本と労働力が対等であるというこの契約概念は、イスラームにおける所有権が“利用”を前提として付与された用益権の性格がきわめて強く、“利用”を伴わない排他的な独占的権利ではない<sup>23)</sup>とする考え方を背景にしている。つまりムダーラバ契約において、資本と労働という2つの要素の上に、つまり資本の利用によってのみ利潤を生み、あるいはその利用により損失を被る故に、1つのプログラムでの損益が完結するのである。ムダーラバ契約に基づく経営という企業形態の場合にも同様のことが言える。

労働提供者が、資金を利用して得た利益は、契約のさいの取り決めにしたがって両者の間で配分される。損失を被った場合は、資金提供者のみがそれを負担し、労働提供者の負担は提供した労働が無に帰すだけにとどまる。この契約の基本条件は、リスクを引き受けるのは資金提供者であって、労働提供者には資金を保証する必要はないことである。もし労働提供者が資金を保証する場合、それは貸し付けに相当するのであって、利潤はすべて労働提供者に帰属することになる。イスラームでは、貸付金にたいする利子の取得は厳禁されているのである<sup>24)</sup>。

さて次に利潤を得て蓄積した財についてみると、その財には一定率のザ



カートが定められており、信徒は義務として拠出し、財の循環を促す。また蓄積された財は、遺産として親族、縁者に配分される。この場合、故人との個的関わりの序列による詳細にわたる配分方法が確立されている。所有者との関係に対応する財の配分は、例えば長子相続、均等相続等が示す秩序性、溝つき空間的な個の画一化に比べ、関係性、アナログ性を強く示すものである。

ところで生産に先行するものとして、土地、鉱物資源についてみると、イスラームにおけるそれらの所有は、占有として認められる所有権にすぎないことが分かる。自然的生産財である土地、鉱物資源、水、その他動植物等を含む天然資源について、イスラーム法は公的所有、国家的所有、私的所有という3つの所有形態を認めているが<sup>25)</sup>、これら自然な生産財の配分は、これらの必要、傾向を充足させるような形態の中で行なわれるが、そのさいの枠組みは、その中で人間に自らの存在、人間性を向上させる機会を与えるようなものでなければならないとしている。各個人に認められる私的所有には、さまざまな理由づけ、条件が定められ、限定されているが、基本的には絶対的、独占的私有ではなく、活用する自由を保証する占有権であるということができる。ここでも生産に先行する財の個別性、原子論的性格がみられるのである。

以上生産に先行するもの、生産、生産の後にくるものとしての商取引、交換、蓄積、財の循環、配分等、イスラーム経済に固有の円環性の構造を、原子論的観点から概観した。イスラームは、その原子論からも明らかなように能力の差、機会、環境、運の差がある以上富める者と貧しい者が存在することを否定的に抱えることをしない。富める者にはその分に応じてその財を社会に還元させ、同時に財の退蔵を禁じて積極的に還流するように促す。経済の低迷を回避し、その要因を除去し、かつ打破する仕組みを、イスラーム経済は提供するのである。

スークにおける経済流通もまた、イスラーム的原則に基づいている。流

通は生産の一部分である<sup>26)</sup>とする考え方は、いわゆる仲介人の存在を認めない。この地域における株式市場の不在、もしくは低迷は、基本的に流通と生産の一部分とする考え方と分ち難く結びついている。例えばシャー時代のイラン、あるいは開放政策以降のエジプトにおいては、株式市場は名目的には存在しているとはいえ、これらの国における経済にとりほとんど何の影響も及ぼしてはいない。エジプトにおいては、むしろ一時的であったとはいえ政府の介入により潰されたといわれるイスラーム会社と呼ばれるものの存在が、いわゆる株式市場に代わるものとして注目されている。このことは、株式が市場を人工的に活性化させ動かすという、実体のない、ノッペラ坊な財の自己増殖を忌避するという社会的規制が、この地域の人々の心性に支えられていることを示している。貨幣が交換価値でありつづけていることは、スーク経済がその基本を現物取引にしていることにより支えられている。つまり見える商行為、実体のある商取引が行なわれているのであり、そこでは一々の商品がそれぞれ固有の貌をもっている。そして固有の貌をもった売り手と買い手が、商行為、経済活動を行なう。個別性、差異性を基礎とする原子論的経済であると名付けうる活動の場がスークである。

以上のような考察に基づけば、影の経済と思われているスーク経済は、実のところこの地域の民衆にとり最も自然な経済行為として、他の領域と通底するネットワークの一部を担い、営まれていることが理解されよう。

二重構造を形成するものとみなされてきた中東における経済の分母を構成するのが、スーク経済であり、社会主義的あるいは資本主義的経済が分子となっているとの仮説は、その根拠となる事象として以下の例を挙げることができよう。シャー体制末期の1977年から翌年にかけて、イラン各地では学生たちの激しい反対制運動が渦巻いていた。これに業を煮やしたシャーは、学生取り締りが手ぬるいとして大学教員の給与を停止した。この発表のすぐあとで、これに対抗しバザール商人が、給与と同額を停止処分

を受けた全教員にたいし支払うことを決定した。結局シャーのとった措置は無効となり、シャーは余儀なく給与停止を取り消したのである。

また、フランスから独立した後のシリアは、政情不安を幾度か経験したが、その都度バザール（スーク）の動きがきわめて重要な意味を持ち、のちの政情を大きく左右した。こうした事例にたいしては、バザール商人がブルジョワ層を形成し、経済力を背景に政治的圧力をかけたといったたぐいの説明がよくなされる。しかし給料の肩代わりを、彼らの権益とどう関係づけることができるのであろうか。これは、直接、間接いずれにせよ権益のみでの動きとは異なる抵抗の姿勢を示すものである。彼らの行動は、共通の場、共有し合っている場、すなわちスークという空間に関わりのある、あるいはその場を取り巻く問題にたいするコミットメントの表明なのである。

これと対比されるものとしては、例えばギルドや財界といったケースが考えられよう。この場合、彼らは同じ権益という共通項で結ばれている。ギルドは機能としての一体性で結びついている。因みに中東イスラーム世界では、近世の一時期を除き、ギルドの存在はなかった。この例外的な近世のギルドは、オスマーン帝国の支配のネットワークとして官製の徴税手段であった<sup>27)</sup>ことを想起する必要がある。

ところで先に挙げた2例が示すように、スークの一体性とは、場としての一体性である。スークは単なる経済空間にとどまるものではなく、商店もあれば、風呂屋、茶店までも含み、そこで行なわれているのは商行為だけに限られず、社交の場、瞑想の場、学問の場といったさまざまな施設が巧みにリンクして存在する空間である。そしてここは、商人だけに限定されない場でもある。非ムスリム、女性等を含むあらゆる人々に開放された空間なのである。

ところで、こうした社会生活の場に組み込まれた経済空間としてのスークにおける商取引の特殊性を、もう1度検討してみよう。先にふれたよう

に交換と贈与の経済が、矛盾することなく一体となって行なわれていること、さらに取引が現物取引であると同時に、相互的取引であることが挙げられよう。

イスラーム法上、商取引は一般的な契約行為の1つである。売買、貸与、会社、ムダーラバ等の契約の一般的特徴は、提供と受容という双方の関わりで成立し、決定される相互取引という点にある。イスラーム法の下で合法とされるには、不正であると解釈されうるいかなる要素の関与、介入も、取引から排除されなければならない。いかなる利益も、それ相応の対価を与えることなしに獲得されるような契約は、双方いずれも行なうことができないのである<sup>28)</sup>。不正な要素の排除は、イスラームが禁ずる利子の概念に基づくものであることは、すでに指摘した。この利子という概念は、労働を伴わずに獲得される付加価値をさすため、「費やされた労働に基づく利得は許容されるが、全過程のどこかで費やされた労働に依拠しない利得は無効」<sup>29)</sup>であるとされる。

イスラーム法は、商取引においても他の契約と同様、契約の目的および契約者双方により確認された義務の遵守を明確にするよう主張する。なぜならばこれら諸要素のいずれかに関して無知であることは、利子の禁止の侵犯、あるいは他の望ましくない結果を招くことになるからである。したがって経済行為を行なうに当たり、イスラーム法は“知識の獲得”と“無知の克服”を要請する。商取引に当たり、商品の交換は、同時に情報の交換でもあり、こうした情報の交換、獲得は、また商品の交換のさいに有利な地歩を提供し、より多い利益をもたらす<sup>30)</sup>。

確かにこうした事柄は、どこの世界でも共通するという指摘もあろう。しかしスークという空間における情報及び知識の役割は、単に経済的な目的達成の基本的条件であるばかりでなく、交換それ自体のプロセスの一部となっている。交換されるものが、個別的にみえると同時に、そのものの自体とそれに関わる情報も個別的に獲得されるのである。とりわけ売買に関

してイスラーム法は、情報の交換、無知の排除、無知にたいする保護を強調している。このことは、経済行為それ自体が排他的に独立したものではなく、また当事者双方の取引で完結するものでもなく、双方または一方の無知が不正な利益(利子)、あるいは損失に繋がり、知識と情報の獲得が公正なる交換(取引)を導くことに対応するのである。それはまた、イスラーム経済が、“社会内部の生活のさまざまな側面を律する、イスラームの普遍的な形態の中で抱えられ”<sup>31)</sup>るものであることを示している。

前述したように、社会空間として存在するスークは、もちろん市場であり、生活維持に必要な物資をここで調達するために人々が赴く場である。ところでスークの内部からみた場合、商取引の場、購買者の集う場、生産者、商人等の生活の場なのである。例えば小売商店あるいは卸問屋の背後にモスクがあり、香料問屋と菓子屋の間を入ると袋小路に公衆浴場がある。ここではいわゆる聖と俗が同居した形になっている。イスラームは、キリスト教と異なり聖俗を截然と区別することをしない。したがって聖職者は存在せず、金品を取り扱う者が卑しいといった発想とも無縁である。市場の外に住む人々は、市場に通い、物資を購入する。時間になれば近くのモスクで礼拝し、休息のため菓子屋の一角で喉をうるおす。ここでは複合的な生活の営みが、滑らかに行なわれ、さまざまな社会生活が営まれる場を提供している。

ここでは、これを例えば西欧の場合と比較してみよう。商取引は俗世の営みであり、聖なる教会の敷地から離れたところに設営される。市場はほぼ純粋に経済行為の場である。確かに中世、近世の市場では、公正な取引を監督するために役人が任命され、不心得者の取り締りにあたった。不正とは、量目のごまかしとか、粗悪品を偽って売ったり、不当な価格での商売などをさした<sup>32)</sup>。

ところでイスラームにおける不正とは、こうした誰の目にも明らかな不正にとどまらず、公的、私的生活全般の規範と密接に結びつく範疇であり、

単に道徳に照らしての違反行為に限定されないのである。イスラーム法は、その主張する価値、理念の実現のために、信徒たちの行動を5つの範疇に分けて規定している。推奨される行為、行なった方がよい行為、どちらでもよい行為、行なわない方がよい行為、禁じられた行為の5範疇である。この正、負の5範疇は、信仰心、社会的公正実現の正、負とパラレルになっているのである。それゆえに人々は自らの行為が5範疇のいずれに対応するかという知識、情報の獲得、収集、交換に重大な関心をもつのである。

以上のような分析から明らかなことは、イスラーム世界における経済的行為の多層性、複合性である。経済的行為に関する動機づけ、目的、それが機能するさいの構造的性に関する分析を通じて、この多層性、複合性の特徴についての素描を試みてきたが、簡単に要約するならば、それが単なる交換経済的視野から決して説明されえない性質のものであるという点である。これまで近代西欧的経済、金融システムの発展に伴い、交換経済に包摂されない経済活動はもっぱら発展途上の要素として無視されてきた。しかし現在の中東世界を観察する限り、単純に交換経済の観点から割り切りえない部分は、二重経済の一方を形成するというより、他方の分母であるといった方がより妥当なほど、この地域の文化、社会的領域に浸透しているといえるであろう。そこでは一般に間接的な交換の上に成り立つ贈与経済と呼ばれるような要素だけではなく、現在ではなにもものも期待しない完全に一方的な讃嘆の経済とも命名しうる要素までもが混在し、それらが経済行為のすみずみにまで浸透しあい、全体的な構造の一部を担っているのである。

この種の分析はようやく緒についたばかりであるが、イスラーム世界の経済活動の真相を把握するために、またその他の領域に関する特殊性を照射するためにも徹底的に追求される必要があるだろう。

注

- 1) Edmund Y. Asfour, *Syria: Development and Monetary Policy*, Cambridge, Harvard University Press, 1967, p. 15.
- 2) M・バーキルツ=サドル、黒田壽郎訳『イスラーム経済論』国際大学中東研究所、1988年、30頁。
- 3) 拙稿「イスラーム経済の構造と位置」黒田壽郎編『イスラーム経済——理論と射程——』三修社、1988年参照。  
黒田壽郎編『イスラーム辞典』東京堂、1983年、20-21頁。
- 4) A. Goitein, *A Mediterranean Society, Vol. I: Economic Foundation*, Berkeley, University of California Press, 1967, pp. 192 ff.
- 5) M・バーキルツ=サドル、黒田壽郎訳「イスラーム経済理論の基本構造——理論と法解釈——」『国際大学中東研究所紀要』II、1986年、142頁。
- 6) M. Kahf, *The Islamic Economy*, Indiana, The Muslim Students' Association of U. S. and Canada, n.d., p. 59.  
Mahmud Ra'ana, *Economic System under 'Umar the Great*, Lahore, Sh. Muhammad Ashraf, 1987, p. xx.
- 7) M・バーキルツ=サドル、前掲書、22頁。
- 8) ムハンマド・イブン・アル=ハサン・アッ=シャイバーニー、黒田壽郎訳「イスラームの経済倫理——『利得の書』について——」『国際大学中東研究所紀要』IV、1989-1990年、415頁以下。  
Al-Ghazzali, *Ihya' Uhum-ad-Din*, vol. II, tr. by Fazul-ul-Karim, New Delhi, Kitab Bhavan, 1982, p. 76.
- 9) M・バーキルツ=サドル、前掲書、219頁。
- 10) イスラームの遺産相続の詳細については拙訳『チュニジア私的関係法』国際大学中東研究所、1990年、20-35頁参照。
- 11) Al-Ghazzali, *op. cit.*, p. 58.  
A. L. Udovitch, "The Constitution of the Traditional Islamic Marketplace: Islamic Law and the Social Context of Exchange," in S. N. Eisenstadt (ed.), *Patterns of Modernity*, vol. II, London, Frances Pinter, 1987, p. 160.
- 12) M・バーキルツ=サドル、前掲書、76頁以下。
- 13) Roberto Berardi, "Espace et Ville en Pays d'Islam," dans Dominique Chevallier (ed.), *L'Espace Social de la Ville Arabe*, Paris, Maisonneuve et Larose, 1979,

- p. 101.
- 14) *Ibid.*, p. 105.
- 15) 黒田壽郎「イスラーム世界の社会編成原理」黒田壽郎編『共同体の地平』三修社、1990年、15頁。
- 16) André Raymond, *Artisans et Commerçants au Caire au XVIII<sup>e</sup> Siècle*, Tome I, Damas, Institut Français de Damas, 1973, pp. 243 ff.
- 17) M. A. Mannan, *Islamic Economics: Theory and Practice*, Delhi, Idarah-i Adabiyat-i Delli, 1980, p. 197.
- 18) M・バーキルツ=サドル、前掲書、246頁以下。
- 19) Al-Ghazzali, *op. cit.*, p. 58.  
M・バーキルツ=サドル、前掲書 271頁。
- 20) 黒田壽郎「初期イスラーム神学」岩波講座・東洋思想第3巻『イスラーム思想』1、岩波書店、1989年、153頁。
- 21) M・バーキルツ=サドル、前掲書、77、85頁等。
- 22) *The Hedaya*, tr. by Charles Hamilton, Lahore, Premier Book House, 1963, pp. 217 ff.
- 23) A. Z. Yamani, *Islamic Law and Contemporary Issues*, MD., The Crescent Pub., 1967, pp. 19-32.
- 24) M・バーキルツ=サドル、前掲書、200、228頁等。  
*The Hedaya*, pp. 289 ff.
- 25) M・バーキルツ=サドル、前掲書、22頁。
- 26) *Ibid.*, p. 267.
- 27) Gabriel Bear, "Guilds in Middle Eastern History," in M. A. Cook (ed.), *Studies in the Economic History of the Middle East*, London, Oxford University Press, 1970, p. 20 and p. 29.
- 28) 商行為に関しては *The Hedaya*, pp. 211-317 参照。
- 29) M・バーキルツ=サドル、前掲書、218頁。
- 30) *Ibid.*, p. 35.  
A. L. Udovitch, *op. cit.*, p. 157.
- 31) マドレーヌ・P. コズマン、加藤恭子、平野加代子訳『中世の饗宴——ヨーロッパ中世の食の文化——』原書房、1987年、第3章参照。
- 32) M・バーキルツ=サドル、前掲書、32頁。



## On the Specific Nature of Economic Activities in the Middle East

*by* Miyoko KURODA

There is no doubt that existing notions and methodologies have been applied to the analysis of economic activities in the Middle East or Islamic World. They have been evaluated mainly in terms of basic economic factors like investment, productivity, income, profit and so forth. What this type of analysis is aiming at is to extract abstract estimations on various economic phenomena by means of concrete statistical data. No one can underestimate the merits and contributions of this type of analysis. But is it not too abstract to make an integral understanding of economic activity as one of the important branches of human activities which are closely interrelated with each other?

Recently some excellent scholars started mentioning the importance of cultural factors in the analysis of economic activities. Whenever we try to make an analysis of economic activities in the regions belonging to different cultures and civilizations, we are obliged to face some characteristics which strongly influence the basic structure of these activities. In other words their structure and function are different from those in the Western world, due to the various cultural factors which are causes for the creation of these characteristics

mentioned above.

In this connection, we can mention the strong trend for the revival of Islamic economy in the Middle East. This revivalism is actually crystalized in different forms like establishment of non-interest banks, Islamic companies and adoption of *mudārabah* style investment and so forth. But they are only a few typical examples easily observable to the eye of outside observers. In the depth of society, people are striving for the reestablishment of social economic justice in the light of an Islamic way of thinking.

In sum, we are encouraged to pay full attention to the role of cultural and traditional elements even in the analysis of economic activities in the Middle East. For example, when we try to investigate economic activities of traditional marketplaces (*sūqs*), it is incumbent on us to study them as a section of an integral whole. In this regard we can depend much on the Islamic way of thinking and value system, which has been constantly supporting the traditional life of the people in this region with a certain harmony.

In Islam, there exists an analog principle that binds all individual parts and the whole with a peculiar relativity. As this principle connects individuals and community, it also creates a close interrelation between economic activities and other activities. A typical example of this is the *sūq*, or traditional marketplace.

The *sūq* is not a place independent and separated from surrounding places, we can find various buildings and institutions in its vicinity that make an organic, integral whole. In other words, it is linked and interrelated with *masjīd* (mosque), *madrasah* (school), *hammām* (public bath), caravansaray and so forth. In the *sūq*, people essentially

engage in commercial activities, but it is closely connected with religious activities, exchange of various information, travel and so forth.

In the Islamic economic system, commercial activities are not completely independent and separated from others. It is only one of all the other elements that form a greater circle, a circle of Islamic economy. The form and location of the *suq* in relation to other buildings and institutions represent in an exquisite way the nature of this “circle of Islamic economy.”

In this small article, the author tries to depict in detail the nature of the circle of Islamic economy, making use of the geographical analysis of *suq*. This helps greatly in the clarification of important problems concerning the dichotomy between national economy and traditional economy, and the parallelism between exchange economy and gift economy.